

* 2011年度が目前に迫るこの3月に、それまでの所属から離れて新たな活動の場を求める会員の方も少なからずおられることであろう。筆者は大学所属のため、この時期は卒業生を見送り、新入生受入れの準備をするとともに、研究室に配属される学生への期待と不安が相半ばする時期である。本会最大の行事である総合大会もある3月は、本会会員である大学教員にとって忙しい月の一つであることは間違いない。

* 最近の「就活」の長期化は、自分が学生の頃（1980年代後半）の状況と全く比較できない。ましてやその直後のバブル期は現在の学生から見ると夢幻としか思えないかもしれない。現状では、学部3年後期（あるいは修士1年後期）から各種説明会と重複するため授業欠席が増え始める。学部4年前期になれば系統的な履修が困難な状況が学生によっては発生する。日本経団連では2013年4月入社予定の採用に際して2011年12月1日以降に会社説明会等を行うよう、会員企業に求める決定がされた。むしろ通年採用を主流にした方がよいという識者の意見もあるそうだが、いずれにせよ、学生・教育機関・企業の三者にとって負担が減り、かつ、それぞれ利益のある状況につながるよう祈るのみである。少なくとも学部3年後期の授業を学生が滞りなく履修できることは期待したい。

* 一方で、企業が新入社員に求めるものは専門知識にとどまらず、社会人としての常識はもちろんのことそれら全てを活用する能力である。経済産業省では「社会人基礎力」と称して、この力に見える化や育成を図っている。このため、会社説明会開催時期が遅くなるろうとも、何らかの準備は大学入学直後から「就業力」育成と称して始まっていることも珍しくない。

* 更に、大学側では「学士力」をキーワードとして、高等教育の質保証という難問に直面している。そこには、いわゆる教授の背中を見て学生が勝手に育つ教育から進化させて、教授の背中を見て学生が身に付けることをあらかじめ計画しておく教育が求められていると筆者は感じている。もちろん、実際に身に付くかどうかは学生の意欲等に大きく依存するため、全員が期待どおりに育つとは限らず、良い意味で

も悪い意味でも教員の期待を裏切る知識と力を有する学生が多数出てくることであろう。しかし、国内外から人材を集めて教育し、卒業生を国内外に輩出するためには、教育の成果を国際的に主張し得る状況を作り出さなければならない。

* 前号において筆者は「工学教育今昔」小特集を担当した。学生の知識を向上し、力を育成する観点で設計された工学教育が、恐らく世界で初めて我が国で導入されたこと、その教育方針や方法は21世紀の工学教育にも通用する面が多々あることをお読み頂けたであろうか。温故知新を実感して頂ければと期待している。なお、明治初期のジャーナルがアーカイブ化され、有料ではあるがインターネットアクセス可能であることも、この企画を通じて驚きを感じたことであつた。本会誌のアーカイブ化も既になされ、1917年創刊号以降がDVDに収録されたものを入手可能である。数年後に迫った本会誌創刊100周年を迎えるとき、本会誌購読は本号のように紙媒体を維持しているであろうか、それともタブレット系デバイスでの購読か、はたまた、別のプラットフォームが主流となっているのであろうか。ざっと読む、じっくり読む、後で調べる、など様々な場面での利便性が向上することで、知的好奇心が更に満たされつつ、知的生産量が増加するような媒体の出現を楽しみにしている。

* また、本号では「医工連携」小特集を担当した。この小特集の著述からは、我が国の優秀なICT技術の医療・医学への導入が進んでいることと、この分野での激しい国際競争下で我が国が必ずしも先頭ではないことが読み取れる。医工連携を更に推し進め、新たな産業や技術分野を切り開き、国際的に先導するためには、どのような知識や力を持つ人材を教育機関は育成すべきであろうか。このような課題でも、本会が密なコミュニケーションの場として活用されることを願う。

* 旅立ちの3月ではあるが、本会委員等の任期は総会日までである。このため、編集特別幹事としては4月以降も任期を残してはいるが、新天地を目指す方、とどまる方共々、気分を新たに4月を迎えたい。

（編集特別幹事 牧野光則）